

第一部会

「無縁社会」の宗教

宮本 要太郎

二〇一〇年一月に放送されたNHKスペシャル「無縁社会」は、NHKによる熱心なキャンペーンもあって、広く人びとの関心を喚起した。その年の年末から翌年始にかけての朝日新聞の特集「孤族の国」はさらにその傾向に拍車をかけた。これらジャーナリズムの問題の取り上げ方は、ある種の危機意識に基づくものであった。その危機意識とは、まずは、NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編著『無縁社会』のサブタイトル「無縁死」三万二千人の衝撃」がセンサーシヨナルに示すように、誰からも葬ってもらえない、誰からも祀ってもらえない「孤独死」に対するものであり、そこでの「無縁」は、いわゆる「無縁仏」や「無縁墓」のそれであった。しかし、その後二ユース番組などでキャンペーンが展開するなかで、次第に、「血縁」「地縁」「社縁」といった日本社会の「伝統的な共同体」が機能しなくなって孤立する人々を次々に生み出す状態を広く問題視する視座へと展開していった。本発表では、一つの「流行語」にもなっている「無縁社会」をめぐる議論を簡単に整理したうえで、その状況と正面から取り組もうとする宗教者たちによる活動の一端を紹介したい。

「無縁社会」をめぐる議論の端緒となったジャーナリズムの立場は、基本的に「無縁社会」を否定的に捉えており、その論調には、社会に警鐘を鳴らす目的が顕著にうかがわれる。それに対し、アカデミズムの世界からは、「無縁社会」を近代化（とりわけ都市化と個人主義化）のなかで急激な変化をとげてきた日本社会の歴史の必然ととらえ、むしろ「無縁」を積極的に評価しようとする動きも出てきた。それを代表するのが、上野千鶴子や島田裕巳である。また、網野善彦の「無縁」論をはじめ、土屋恵一郎などのように、以前から「無縁」そのものに積極的な意味づけを与えてきた研究者も存在する。ここでイデオロギー的対立軸を援用すれば、アカデミズムの議論がリバタリアニズム（上野や島田）やリベラリズム（土屋）の立場に近いのに対し、ジャーナリズムのそれはある種の共同体主義ないしは単なる「伝統的共同体」への郷愁をうかがわせる。これらに対し、宗教団体ないし宗教者による受けとめ方は、ジャーナリズムの影響を強く受つつも、そこから「無縁」を現代社会における宗教の存在意義を見直す契機と捉える立場も生まれてきている。すなわち、既存の縁から断ち切られた状態（無縁）は「苦」を伴うものであるが、それはまたその「苦」を契機として新たな関係が生まれる（結縁）可能性を孕むものでもある。

この最後の立場は、現場の第一線における宗教者によるさまざまな実践にその理念が顕著にうかがわれる。たとえば、「支縁のまちサンガ大阪」や「寺ネット・サンガ」は、宗派間（宗教間）の境界を越境して協働していこうとする試み（超宗派性）であり、「soulin 釜ヶ崎」や「大阪希望館」は行政や労働

組合や市民団体と宗教者が協力する点で、「宗教」の枠を越境する試み(超宗教性)である。また、「宗教者災害支援連絡会」や「宗教者災害救援ネットワーク」は、宗教者と宗教研究者が緊密に連携を取り合っている点で、「宗教研究」という営みに自明のものとされる研究の主体と客体という分割線を双方から「越境」する試みでもある。さらにこれらの「越境性」がすべて見られる点で、「支縁のまちネットワーク」の活動は注目し値するといえよう。支縁のまちネットワークの今後の展開は、「社会的行為主体としての研究者というポジショナリティ」(櫻井義秀)という点でも、「宗教者と研究者の密接なコラボレーションによるアクションリサーチ型の調査研究」(白波瀬達也)という点でも、これからの「宗教研究」や「宗教者」のあり方に一石を投じるものとなるかもしれない。

アメリカ黒人のオリシヤ崇拝運動にみる

縁の形成とジェンダー

小池 郁子

本発表の目的は、アフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)の社会運動の一つである、オリシヤ崇拝運動において編み出される縁——人と人とのつながり——と、そこでのジェンダーにまつわる事象をとりあげ、運動とジェンダーとが交錯する領域について考察することである。具体的には、オリシヤと呼ばれる西アフリカ、ヨルバの神々を崇拝する宗教・文化実践を核にし

たオリシヤ崇拝運動が展開される社会空間に着目する。そのうえで、運動の社会空間が形成されるなかジェンダーはどのように規定されてきたのか、またジェンダーをめぐる問題が運動にどのような影響を与えてきたのかについて、運動形態の変化とともに検討する。

オリシヤ崇拝運動は一九五〇年代後半にアメリカ合衆国で組織化された。この運動の当初の特徴として、ブラック・ナショナリズム(黒人分離主義)、伝統的価値観・生活様式の尊重、身体的な文化の実践、コミュニティ(生活実践共同体)の形成、脱都会志向などがあげられる。こうした特徴を踏まえて、本発表は、初期のオリシヤ崇拝運動をブラック・ナショナリズムと伝統的価値観を軸に、人と人のつながりを形成する社会運動として注目する。それでは、ブラック・ナショナリズムや伝統的価値観をめぐっては、どのような議論がなされてきたのであるか。ブラック・ナショナリズムに関しては、それを実践する社会空間の暴力性、閉鎖性が強調されており、社会や政治とのコミュニケーションが欠如する傾向にあると論じられている[中条二〇〇二、本田二〇〇五]。また、伝統的価値観については、性別分業などの伝統的価値観によってコミュニティが束縛されていると指摘されている[Clark 1997; Curry 1997]。あるいは、コミュニティ形成の際に、アフリカの伝統的価値観を強調しすぎると、家父長制を支える性規範、性役割が再強化されかねないとの議論もある[Garloy 2000]。

そこで、本発表は、ブラック・ナショナリズムのなかでも、とりわけ伝統的価値観を重視するオリシヤ崇拝運動の変容過程